

和語燈錄の三部經釋と蓮生の上品願生

小西存祐

(一)

熊谷蓮生が上品上生の往生を願求したといふことについては、勅傳二十七に蓮生の「發願文」や「夢の記」などを擧げて詳しくその事實が叙べられてゐるが、その他の傳記にはどこにも所見がない様である。所が最近嵯峨の清涼寺から、蓮生の自筆と傳ふる一卷の誓願狀といふものが發見されて、その文を見ると、全く勅傳に引いてある「發願文」や「夢の記」に符合をしてゐる。尤も同「誓願狀」が果して蓮生の自筆であるかないかは、猶ほ大に研究の餘地がある。と云ふは、蓮生の發願文並に夢の記は、當時既に都の方で大ぶ轉寫をされてゐたといふ形蹟が勅傳の中に見へてゐる。又その誓願狀は一方その筆蹟から觀ると、まるで無智の者の代表者の様に云はれてゐた蓮生の自筆としては、少しく出來ばへが過ぎてはゐまいか、などといふ疑も起つてくる。かたぐ寺傳を其まゝに信用するといふことは、なほ多少の不安がないでもなぬが、ともかく同文書が鎌倉時代のものであることだけは確である。殊に勅傳にはその發願文も夢の記も、「已上取詮」として多少文言が略されてゐるが、誓願狀の

方はごちかも具文で、多分原文のまゝで有つたことゝ想像される。また勅傳には、「蓮生自筆の發願の文夢記等は、みな和字なりといへども、よみにくきによりて、少々漢字になす」と云つて、特に斷書がしてあるが、誓願狀の左は終始一貫みな和字で、上の勅傳の文に所謂「蓮生自筆の發願の文夢記」といふは、恐らくこの清涼寺の文書を指したものであるふと思はれる。して見るとこの誓願狀は、假令それが轉寫の本であるとした所で、ともかく勅傳の原本となつたもので、宗史の上からも非常に貴重な一史料であると共に、勅傳も之によつてその典據が明らかにされた譯である。

(二)

乃で問題は、然らば蓮生はどうして上品の願生などといふ、ごちらかと云へば寧ろ突飛な様な發願をするに至つたであらうかと思ふことである。勿論これには色々理由もあつたであらうが、自分の觀る所では、まづ第一に彼の性格が然らじめたものと思へる。それは蓮生は、流石に關東の荒武者と云はれてゐた男だけあつて、その性格が武人であり勝な一徹者であつた。この事は改めてこゝに説明をする迄もなく、彼の傳記を一讀した者は、何人もちきに觀取できることであらう。とにかく斯うした彼の直線的性格が、やがて彼をして「下八品の往生われすて、ねがわす」といふ様に、上品往生を發願せしむるに至つた者なのであるふと思はれる。併し以上は唯だ内因である。この内因を外から動かして、實際彼にさうした行動を採らしめたものは、宗祖の教化であらねばならぬ。夫れについて相當ること

は、了惠の和語燈錄の中に拾録されてゐる宗祖の「三部經釋」である。

一體宗祖の一代の著作中に於て、上品上生の往生を勧めてゐられる所は、この「三部經釋」を除いて、外にはどこにも見當らない。

例へば同じ宗祖の三部經の註釋である漢語燈錄の「三經私記」を見るに、まづ初の大經私記には、念佛往生の三品の區別を立つる所以を述べて、

念佛往生有三二種品。爲欲令下行者捨中下而欣上品上故。

と云つてある。此文はちよつと見ると、宗祖が上品上生の往生を勧められた文の樣にもあるが、實際はさうではない。宗祖はたゞ佛意の邊から推して、經文の説相を解釋されたまでで、佛意がさうだからと云つて、直ちに宗祖は上品上生の往生を勧められはしなかつた。又た「彌陀經私記」には、七日の執持名號が上品上生の修因なる所以を述べて、次いで云く。

又明往生修因九品之中多明上々。一。行者發願理亦可期上々。一。夫我等建往生願非欲己身快樂。處生死淤泥起菩提願行。妄心內發塵境外競。恐自他共沒何得救攝。不_レ如疾到_レ彼刹證得無生具足神通得大自在。變現十方施作佛事。期上品往生意在於茲也。故置今經意亦上々品明念佛往生也。

と。此文の意も、唯だ經文の説相が上々品に約して明してあると云ふまでで、さうした佛意から云へ

ば、行者の發願も理また上々を期すべきである。けれどもそれは理として上々を期すべきで、宗祖はそれを必しも實際に勧め様とせられたのではない。されば又宗祖は「觀經私記」に、九品の往生を釋する中、下品上生を釋し終つて、

九品之中此品最要モニツ。顯相レリ。當ガ。我等分ニ。

と云ふことを言つてゐられる。して見ると宗祖は、今時一般の道俗としては、まづ下品上生を願求するといふことが、その分齊だといふ様に觀てゐられたものと思はれる。

(三)

處が翻つて、和語燈錄の「三部經釋」を見るに、全くその所説が、上のそれとはちがつて力を極めて上品上生の往生が勸めてある。同「觀經釋」廻向發願心の下に、先づ問を出して、
そも／＼かの國土に九品の差別あり。われらいつれの品をか期すべき。

と云ひ、次で答へて、

善導和尚の御意は、極樂は是報土、彌陀は是報佛なり。されば未斷藏の凡夫はすべてむまるべからずといへども、彌陀別願の不思議にて、罪惡生死の凡夫一念十念してすなはちむまると釋し給へり。しかるを上古よりこのかた、おほく下品といふとも足ぬべしといひて上品をねがはず。これは惡業のをもきををそれて心を上品にかけざる也。もしそれ惡業によらば總て往生すべからず。願力によ

りてむまればなんぞ上品にすゝまん事をかたしとせん。それ彌陀淨土をまうけ給事は願力の成就するゆへなり。しかればこれ念佛の衆生のむまるべきくになり。乃至十念着不生者不取正覺とたて給ひて、この願によつて感得し給ふどころなるがゆへなり。

と云ひて、總じて先づ上品往生の可能なる所以を述べ、更に又詳しく九品の行事等について、今此觀經の九品の業をいはゞ、下品は五逆十惡の罪人、臨終の時はじめて善知識のすゝめによりてあるひは十聲あるひは三聲、稱念してむまるゝ事をえたり。しかるにわれら罪業をもしといへども五逆をばつくらず。行業をろそかなりといへども一聲十聲にすぎたり。臨終よりさきに彌陀の誓願を聞得て、隨分に信心をいたす。されば下品まではくだるべからず。

中品は小乘持戒の行者、及世間の孝養父母仁義禮智信等の行人なり。この品には中々にむまれがたし。小乗の行人にもあらず、またほもちたる戒もなければ、われらが分にあらず。

上品は大乗の凡夫、菩提心等の行なり。菩提心は諸宗をのく其意元同じからず。淨土宗の意は、淨土にむまれんとぬがふを菩提心といふ。又念佛はすなはちこれ大乗の行なり、無上功德なり。しかれば上品往生は手をひくべからず。

又本願に乃至十念とたて給ひて、臨終現前の願に大衆に圍繞せられてその人のまへに現せんとたて給へり。中品は聲聞衆の來迎、下品は化佛の三尊あるひは金蓮花等の來迎なり。しかるを大衆に圍

繞せられて現せんとたて給へる本願の意趣は、上品の來迎をまうけ給へり。なんぞあながちにあひすまはんや。

又善導和尙三萬已上は上品上生の業との給へり。數遍によつて上品にむまるべし。又三心について九品あるべし。信心によつて上品にむまるべしと見へたり。

上品をねがふ事はわが身のためにはあらず。かのくににむまれをはりてかへりてとく衆生を化せんがためなり。これあにほとけの御意にかなはざらんや。

と云ひて、頗る委細に上品上生の往生が勸説してある。乃で自分は考へた、或はこの三部經釋は、宗祖が特に蓮生に對し彼の性格を觀破して書き與へられた法語ではあるまいかと。若しさうだとすればその假名書であることも成程どうなづかれる。又その年代等も略ぼ推定が出来る。且らく記るして大方の示教を俟つ。(二三、六、五)